

矢沢遺跡の発掘調査から見えてきたもの

「呪術に支配される原始の暮らし」

グループ「時の旅人」代表 酒井 幸則氏

ただいまご紹介いただきました豊丘村の酒井と申します。

縁があってこの建設用地を岩崎さん（役場職員）と共に調査をさせていただきました。その時の調査の成果を是非とも地域の皆さんにご覧頂くということで高森町と話しを進めていきましたが、今回こういう機会を設けていただきました。

実は、私は今からどの位前か、昭和46年頃ですか、中央道が通る時分発掘調査を行いました。その時私は山吹が調査の担当地区でして、川子石遺跡や神田裏遺跡を担当したことがあって、高森町は非常に懐かしいところです。

このたび縁があってこういうことになったわけですが、調査が終わってすぐ吉田地区の皆さんの集まりがあって是非成果を聞きたいという事があってたまたま作った資料が有り、今日はそれに色々付けて皆さんに見て頂きたいと思えます。

私は考古学を大学で勉強したり、その後、色々かじったこともありましたが、考古学者でもないし研究者でもないし、ただの物好きということで今日は学術的にそう高いレベルのお話しはできませんし、話しをしても皆さんは何の話かなということになっちゃいますので、私なりに今までの経験から感じたものをご紹介してそういった遺跡が有ったのかなあということを感じてもらえればよいと思えます。

話が飛躍してあちこち飛びますので皆さん気をつけて聞いてもらえればと思います。今も話しましたが、ただ出てきたものを、これは縄文式土器だ、何千年前だ、新しい古いと喋っていてもパツときませんね。だから今日は出てきた物からどんなことが見えてきたか、どんなことが考えられるのかということを中心に「呪術に支配される原始の暮らし」といったような事のごく一部でも感じてもらえればということで資料を用意してまいりました。

矢沢遺跡の発掘調査

まず矢沢遺跡の展望です。これは豊丘の林の杜から吉田の方を見たところ

ですが、皆さんにご説明するまでもありません。この矢印の下の方が矢沢遺跡です。

天竜川から離れた本当に山付けという感じですかね。これはアップで近くを見たところですが、この黄色い丸の中が矢沢遺跡ということになりますが、これは真ん中の谷の中にある小さな扇状地というか、台地が矢沢で右が千早原で左が月夜平です。

そういえば月夜平といえば私は思い出がありまして、高校の時です。

昭和45年？46年かな？原野だった所へブルドーザーを入れて、木を切って耕地にしましたね。ちょうどこの下段、全く原野だったですね。

この辺かな？7人殺したかまだ家が残ってた。この間行ったらまだ柿の木が残ってた。そこを通ってきてこの所を発掘してました。座光寺の今村善興先生を中心に我々高校生が発掘して、瑠璃寺の裏の何とかという空いたお宅があって、そこへ10日ばかり泊り込んで合宿して調査した、そんな懐かしい思い出があります。

そういう懐かしい月夜平の北側の遺跡です。この遺跡はですね、もともと町としても遺跡登録をしてなかった所です。

高森町も相当というか極端すぎる位平らな所は全部遺跡指定ということになっているようですが、それでもここは遺跡指定になっていなかったということです。

火葬場の候補地になって町でも遺跡があったら困るということで試掘をしたら、土器が出てきて、

ここも遺跡であるということがわかってこういった調査が始まっていくわけですが・・・

はい、これは矢沢の周辺にどんな遺跡が有るかということですが、これは地元の皆様に見ただければ、千早原、月夜平、大島山東部、ヨシガタ、赤羽根、広庭、出原という高森町を代表する、濃厚な遺跡がずらっと集中している遺跡分布の帯ということがわかるわけです。これは調査に入る前の遺跡の状態、二又沢大橋ですか、あの橋から遺跡を見下ろしたところです。

ここにはかつては宮島さんの関係の方のお家が3、4軒というふうに伺ってしまして、ここには墓地も有って今度の事業で下の方に移転されたということ。

明治時代でしたかね、ここに3、4軒お家が有ったという事。これは調査の最中、ずっと天竜川の向こう伊那山脈の方が見えています。

南に向いた穏やかな傾斜地で、強い風の当たらない所です。これは下の方から二又沢大橋、そして裏に有る尖った山、あれは吉田山でいいんですかね。吉田山ですね。

あの山が非常に意味を持つてくるわけなんです、そして遺跡の南側を二又沢ですか、小さな川が流れているという非常に水にも近いという水便の良い所です。

ただこの水をですね、矢沢が田んぼに取り入れるには相当上流から水を引っぱってこなくてはならないということですが、矢沢の場合は千早原からの湧水が豊富で、水にはうんと恵まれていたということ。湧水が豊富ということは、この調査にうんと苦勞がありまして、雨が降れば水が溜まってしまうという大変な事もありました。

良い水が出るから魚はマスとか、他の魚もやってたなあ？養魚場が有りましたね。

今移転して上の方に新しい養魚池がありまして、大きなマスなど養殖してますが、水には非常に恵まれた所ということになります。

残された先人の足跡

ここに考古学略年表とありますが、一体どの辺に矢沢遺跡が関係したかということですが。

この辺では3万年位から後の人々の営みの跡が見つかるわけですが、矢沢遺跡では大体8,000年から9,000年位前、それより後の物が見つかるということですので、だんだんそれを見て行っていただければと思います。

ここでひとまとめにしておきますと、矢沢遺跡で見つかったものといいますと、9,000年位、少し古くみえますが、この時代の土器や石器などが見つかっております。

それと、縄文時代中頃4,000年位前ですかね、この時代の土器や石器も見つかっておるということ。

つまり、土器や石器だけが見つかっておるということは、住居の跡はわからないんですね。つまり掘った所が限られていますから、その近くに住居跡だとか他のものが埋もれている可能性はあるわけですが。矢沢遺跡が一番賑わったのが縄文時代の後期という時代で、3,500年位前かなと思います、石を集めた何かの施設、あるいは住居の跡、そして土器石器などが見つかっております。

それと縄文時代の終わりの、2,500年位前といいますか、この時代の土器も見つかっておりますね。弥生時代の非常に新しい後期という最終末の時代の住居跡も見つかっております。

それと器の壊れですが、1,200年位前の平安時代の物も見つかるということですから、9,000年位前から断絶はあるんですけども、ある時期、人が来て居なくなくなって、また来て居なくなってしまうということで、ずっと古い時代から平安時代・江戸時代・明治時代、続いてずっと人の営みがあったということが知られるわけです。

矢沢の最古の人々

では具体的にどんな物が出てきたかと言うことですが、8,000年とか9,000年位前に実際に人々がここに来たんですね。

来て何らかの生活をしたんですが、おそらく短期間だと思いますが獲物を追ってやってきた人達がワ

ンシーズンおったか、そんなに長くではなかったかちょっとよくわかりませんが、この矢沢で何らかの生活をしていたことは次のこうした小さな土器から窺われるわけです。実はこういった古い時代の土器はあんまりあっちこちで出るものじゃないんですが、どういうわけか天竜川の西側には非常に多いんですね。

この辺でいえば松川から高森、座光寺にかけて、それから伊賀良の方、とにかく山付けに非常に多いです。

特に高森町が非常に分布が濃いですね。ですから古い時代、特に縄文時代の早い時代には人々が暮らし易い所だったかなあという気がしておりますが、一番有名な所が増野の川子石と呼んでいますけれど二金？の老家、あそこの前の中央道が通っている所、あそこが増野川子石という所で、あそこからは10,000年位前のこの地方で一番古い縄文土器が出ています。

ですから10,000年前にはこの地域に人が来ていることは確かで、そういった人達がだんだん散らばって、この高森町を中心に足跡を残していったということです。

こういった人達はこの辺では定住をしておりません。ですから短期間来てまたどこかへ移動していくという、そういった形になると思います。

これは特徴的な土器でして、矢じりはわかりますね？弓矢の先に付けて狩人が動物を獲る時に使った道具です。土器が特徴的なんですね。

こういった押型文という土器。つまり皆さん地下足袋を履いて柔らかい所をぐっと踏むと地べたに靴底の跡がつかますね。文様が地下足袋でなくてもいいんですけどガチャガチャの後がある。こういうふうに刻まれた土器なんです。

ですから、鉛筆位の太さの棒にお米の粒のようなものを刻み込んだり、こう山形の溝を何段にも刻むんですね。それを土器へころがして押し付けるとこういう形になる。

これはお米が並んだようになるので、昔は穀粒文といったけれど今は楕円文といっています。こういう押型文土器が高森町は非常に多いです。

ですからこういう土器があるということは、ここである期間生活したということがよくわかるわけですね。高森町でどこか忘れましたが、この時代の住居跡がひとつ見つかっていますね。

簡単な家を作って、屋外炉といって家敷の外へ石を集めた小さな炉を作って生活をしていて、そういった痕跡が残っているわけですが、あの矢沢でも古い昔にそういった炉を作ってあそこでキャンプした人がいたわけなんですね。

ここからですね、まじないごとというのが出てくるわけですが、縄文人というのは自然界に直接係わりあって生きているわけですね。

ですから自然のなすがままに生きていかねばならないということで、自然をどうしようというわけにはいかないんです。ですからあらゆることがまじないごとによって決められていて、それに従って行動していたということがよく解るわけです。まじないごとというのはのろいごとではなく、おまじないです。

石を集めた祭祀の場

そういう中で一番ポピュラーなまじないごとというのが埋甕の祭りや土偶の祭りというのがあります。それと石棒の祭りというのがありますが、こういうものは結論から申しますと殆んどが生命の再生であるとか、安産・蘇り・子孫繁栄・豊穰・祖霊崇拝とまあこういったものに集約されてくると思うんですけど、こういったお祭りが有るということをまず頭に入れておいていただきまして矢沢遺跡を見ていきたいと思えます。実は調査に入った時に遺跡の中にどでかい石があったんですね。

100年かもうちょっと前、矢沢に田んぼを造るんですけど、当時の機械力ではこの石はどかしきれなかったんですね。ですから石を残して土手を造ったのであんなきれいに見えてる田んぼも、この地区だけは土手が表に飛び出したような非常に成の悪い形の田んぼになってしまいました。

その部分から面白いものが出てきたんですが、この大きな石の頭が窪んでますね。よくお宮とかに行きますとありますね。

昔、子供が悪さで石でコンコンやって窪ませた、これが田んぼの土手に残っていた大きな石の上にもありました。お父さんお母さんがお田植でもしてる時に土手において良い子でおれよって言われたもので、石のそばでコンコン石の頭叩いていたんですかね。まあこういった物が残ってる。これも一つの文化遺産なんですけどね。

この石は今度残してくれてあるんじゃないかな？庭に。確認してないけど・・・

こういった大きな石が三つ残ってる。土手がこうきて田んぼがこういうふうに入り込んだ、変な半島状に飛び出た田んぼになっていましたが、その下からこういった石を並べた痕跡がでてきております。

この石は全部地元にある石です。地山にある腐り石というか花崗岩が風化しかかった石ですね。こういった石がいろんな形で置かれているってことですね。

これを見ると非常に大きな石が斜めになっています。これは長さ1メートル位あるんですけど、この辺は石を積んでるようにも見えるし、この辺は明らかに石を敷いていますね。

「生と死」、祭りの広場

私たちは測量が終わった後この石の下をよく調べてみたら石が立ってた穴が出てきました。ですから当時は石が立っていたんだが、長い年月のうちに斜めに倒れたってことですね。ここに丸い石がありますがこの石はちょっと覚えておいてください。

これで石が敷き詰められているということ。これを全体の地形の上から見るとこういう形になるわけですね。

石が敷き詰められているということ、石が直に立てられていた、そして向こうに代表的な尖ったお山が見えるということ。これは非常に意味がある有り方だと思うんですが。これは石の大きさを見て戴くためにスタッフがおりますが非常に大きな石です。

真夏に始めた仕事も霜柱が立つ位までやっておりますけれど、これがどういうものかとまあいろいろ考えられるわけです。この近くで考えてみますと、松川町の部奈から見つかったこういう構造物があります。

部奈という広い平らですから構造物も大きいわけですが、石がやっぱり集められている。あるいは石を組んでいる、平らな石を並べている、これは普通、輪になって並べているから環状列石なんて専門家は言うんですけど、こういった物がよく見つかるんです。

この部奈の場合は大きいですから造りもしっかり出来ていて、石は殆んど天竜川から運び上げています。

矢沢の場合は地元の石ですからそういう違いはありますが・・・こういった中でこういった細長い棒状の石が部分部分置かれていましたから、これはおそらくみんな立っていたんだと思いますね。当時は立っていた。中にはこういった男根状、男性器ですね、こういったものを立てている場合もあります。で、こういうものと矢沢の石となにか共通点がありはしないか、そういうところから出てくるこういう石器があります。

つまり男根状の石棒、つまり男性器を模した石器なんですけど、ちょうどここ資料館を入った所にも2つばかり見えてますね。これらは非常にりっぱな石棒、これは松川の物。1メートルあります。

折しよれちゃって、お家の方がここにステンレスを巻いたもので、見に行くとここらがぞもぞもします。

これは豊丘の資料ですがこういった物が出てきます。これは中央道の報告書から出してきましたが瑠璃寺前という遺跡。中央道が通っている瑠璃寺前を掘ったときにこういう物が出てきました。住居の中の囲炉裏の中に甕が埋まっていて、その甕の中によきと石の棒が立っていました。

私達もこれを掘った時に非常に珍しいということで、これを復元しようということで、こういった石

を全部瑠璃寺の客殿に登る階段の右側、あそこに一時復元したことがあります。萱葺きの屋根を作って、たしか火災の後に取っちゃったか今行ったら無いですね。

本物の石棒を置けないから、豊丘の石屋さんに造ってもらいました。そういうものがありました。非常にめずらしいですね。

石の棒が甕の中に立っているということ、矢沢と何か結び付きがないかということですが、これは後から出てきます。

石のお皿と石の棒が穴の中に埋めてあるという所。これはお墓の穴ですね。さっき部奈の石を並べた施設がでましたね。あの中にある穴なんです。お墓の穴がある。

穴の開いた石のお皿と棒がある。私達は穴の中に寝てみた。ちょうどいいんですね。

頭の上にお皿を伏せるとお腹のあたりへ石棒がによきと立つというちょっとエロチックな構図になるわけですが、実際にこういうものが出ていますね。ですから、あぁいった石を並べた施設というのはこういったお墓とも関係があるんじゃないかということになるんですね。

はい、それで矢沢に戻ってきますと、石の棒であるとか石の棒と同じ性格を持つてくる立石という自然の石を立てたものがあります。こういったものはいろんな考え方があるんですけど、ひとつには祖霊崇拜の依代ではないかという考え方が有ります。

松本辺りにもありますが、東北地方に一番そういった話がありますけれど、死ぬと山へ還る、山の一番高い所へ死んだ先祖霊は集まるんだと。ですからそういった先祖の霊を祭りのときに自分たちの所へ招くには依代がいるわけで、それがどうもこういったものではないかと。

石の棒だとかこういった自然の石を立てた石を集めた施設というのは一つの共通点があって、山がきれいに見える所、その山も地域を代表するような秀峰。例えば先程の松川町の部奈なんかはそこへいくと中央アルプスの南駒が綺麗に見えますね。

あるいは大町の方、浅間山の方、八ヶ岳の方。代表的なのは富士山。そういった所に石を集めた構造物が造られるという特徴があります。

とすると矢沢ほどうかというと、このちよんと尖って見える吉田山、これがひとつのシンボルであるし、もうちょっと180度目を向けますと南アルプスが非常に綺麗に見える。だから、もしかしたら矢沢の石を集めた集石遺構というのはある種の祖霊崇拜の拠点、お祭りをする場所のひとつではなかったかなあとも思うわけです。

そして、矢沢の沢山の石の中でひとつだけ選ばれた石があります。大部分は地山の石ですが、ただ一個だけ青石があります。天竜川にある硬い石ですね。あそこにも展示してありますがこれが棒状の石なんです。これは立っていれば立石といいますが寝ていたので一応石柱と呼んでいます。もしかしたらこれは立っていた可能性がありますね。だから特別選んだ石、天竜川から拾われて持ち込まれたのが意味があるわけです。これが石棒と関係してくると思うわけです。とすると石棒はないかと調査中も一生懸命棒探しをしましたが有ったんです。矢沢に棒がありました。掘った所のすぐ上、宮島さんの若宮様だか氏神様が祭られております。その祠の中に棒が祀られておりました。宮島さんにお聞きしたら、どこから出たのか由緒については全然わからないということですが、おそらくお宅があったくらいですから田んぼか何か掘った時に棒が出てきて、ご先祖様がこの形を見てこれは若宮様だなんてことで祠の中にお祀りしたんじゃないかなってことです。

ですから矢沢にはこの石棒が有ったと言って良いと思います。この石を敷き詰めた所を掘ってみますと、裏側からいろんな穴が出てきました。何の穴かわかりませんが、よくこういった石を並べた所にはお墓として掘られた穴が有るんですね。さっき出てきましたね。

他の遺跡では穴の中にお皿と棒が立ってたやつ、あれもそうですし、焼いた骨が入った穴もあります。だからこれらはもしかしたら何かお墓的に掘った穴かもしれないなあとということで細かく掘って見ましたが、裏付ける物は何も出てきませんでした。出てくるものは細かい土器の破片。で、そこから少し離れた所には綺麗な穴が有って、この中からは土器と石を組んだような跡が出てきましたので、これは

もしかしたらお墓の穴ではないかなあと考えています。

祭りの場の周辺

ちょっと石棒から離れていきますけど、こういった丸い石が良く出ますね。何でもない天竜川の川原に行くといくつも有る、お母さんが見れば漬物の石になるような石です。資料館にも展示してありますけど、こういったような丸い石というのはお宮なんかに行くところんころんと置いてありますね。それとかいろんなお宅の若宮様とか氏神様の祠に於いてあるところもありますし、先ほどの矢沢の氏神さまにもこういった物がいくつも置いてありました。

これは東京の西の方、八王子から山梨、八ヶ岳にかけてはこういった丸石の信仰というのがあるそうです。道祖神なんかにもこういった石が祀られているということがあって何かおまじない的色彩の強い石ということで縄文時代の住居からも出ますし、石を集めた所からもでています。そういうものが矢沢からも出ているというわけです。

これはですね、今見えていたいろんな穴の所に祭られていた形で出てきた小さな土器ですが、復元するとこういう形になっています。非常に小さな土器ですがこういったところに黒くみえているのはお焦げですね。ですからこれで物を煮たことは確かです。煮こぼれが炭化してこういうところに付いている。しかしこんな小さな入れ物ですから、一人用だったのか家族用だったのか神様にお供えする特別な食物を煮た器だったのかよくわかりませんが、こういったものが2個体ほど穴の中から出ています。あまりにも小さいので特別な意味を持った容器なのかもしれませんね。

ああいった石を集めた部分の外側から出てきたものが石皿と言うものです。展示してありますけれど石が窪んでますね。石臼といったら良いかな？そして物を磨り潰す摺り石、あるいは磨き石といった様な物が出てきます。

この石は実は地元の石ではないんですね。これは諏訪地方、八ヶ岳の方から持ってきた安山岩という石です。

何所で作ったかわかりませんが諏訪方面から持ち込まれた道具ということがわかります。今日も「諏訪の石」ということでわざわざ諏訪から見えている方がいる。まあ熱心な方がいると思って。平出さんという方ですけどね。縄文の研究の専門家ですけど「これは諏訪の石でいいかな？」・・・「そうだなあ」・・・まあそういうことです。

つまりこれは安山岩と言う石で作られた石臼で、この辺の石を使う場合は天竜川の花崗岩を使っています。こんな綺麗な石ではなくてもっとざらざらしています。勿論これは粉食文化、うどんやそばでなくていいんですけど、でんぷんを捏ねたりしたんでしょうけどいろんな物に使えます。

よく私も小さい頃、おばあちゃんの所へ行くと、何か鳥の肉かウサギの肉か何か石で骨も何もみんな叩いてぐちゃぐちゃにして肉団子みたいにして・・・昔はやりましたね。見ていると気持ちの悪いぺちよんぺちよんしていましたが、ああいうものに使うんですね。そういった調理の容器なんですけど、考え様によるとあれに入れておいて、もう一個同じ物を伏せると中に蒸し焼き料理が出来るとかいろんな考え方があるんですけど、いずれ本来は調理具ですが民俗学的に見るとこの石のお皿は女性だそうです。

お餅をつく杵は男だから石棒は男、石皿は女ということになります。石棒と石皿が一緒になって出る例はうんとあります。先程もそうでした。

生田部奈ではお墓の中に石のお皿、それも穴が開いてしまって器としては生命を失ったお皿が石の棒と一緒に埋めてありました。ですから矢沢でもそういったお皿と立石と一緒に出るというこれは大きな意味がありますね。よくお餅をつくと臼と杵、ぺったんぺったんつくことによってお餅が生まれてくるわけですね。それがいわゆる性行為の発想に通じそこから物が生まれてくるという。だから物生まれるのは赤ん坊とかそういうものだけでなく、あらゆる物、植物であり、野山の動物であり、あらゆる生命を持った物、そういうものが生まれる。だからこういった石皿だとか石棒はある意味、物の生産に関するお祭りのシンボルだったんではと考えるわけです。

ああいった石を集めた周りから出てきた物にこういった物も有りました。代表的な物は耳飾ですね。これは耳たぶに挟み込むんですね。初めは小さい物でやるようです。割り箸位の穴を開けてだんだんそれを太いものにしていく。いまでも南方のほうの原住民がやっているのを見ますね、耳たぶがこんなに長くなって気持ち悪いくらい。唇にやっている人もいますね、こうはめ込んで。我々は変だなあとと思うけれど彼らにとっては何も変ではないんですね。ですからこれもおそらく耳飾でしょうということになっている。

こういった耳飾、胸飾りは縄文時代にあるんです。腰飾り腕飾りあるんですけど。飾り物というと我々は女性を意識しますね、まあ今は男もしますが、異性を意識させる為に付けているんじゃないかという雰囲気が強いですけど、昔は男も女もやるわけですね。だから単に身を飾るというわけではなくていろんな意味があるわけです。

たとえば権威の象徴であるとか、一説によると自分の在所出身部族そういったものを表すということにも使われたんじゃないかと言う説もあります。

とにかく耳飾と言われるもの、精巧な彫刻を施して粘土で焼いて造った物がここから出ているということは、これを付けるべき人があの石の周りにおったんじゃないかなということなんです。

ただ私達は耳飾なんかが出ると、イヤリングなんかは必ず一対ですが、こういうものが対で出てきたということは殆んど無いです。とすると、あの人、片方付いて無いなということじゃなくて、片方だけでもよかったのかもしれないね。

いずれにしてもこういうものを付けるべき人があそこにおったと言うことは事実です。

それとこの水晶、これは斜めになっているでかい石の直ぐ下から出ました。あそこに置いてありますが小指の先位、今子供にやっても喜びませんが、当時としてはものすごく貴重な物です。それが山梨県の方から物々交換か何かで段々伝わってきたと思います。

だから諏訪の方で作られたさっきの安山岩の石皿がこっちのほうに来てもおかしくはない。もっといえば 9,000 年 10,000 年前の石器に黒曜石の矢じりがあります。ガラスみたいな石、あれは全部あっちの方から来ている。そのころから物資の交流があったということだから特に不思議なことではないが水晶は珍しい。

これでも石棒なんです。先程のりっぱな石棒、あれは縄文時代中期という中頃の物ですけど、矢沢の時代ですと小さいというか実物大と言うかリアルな物が多くなります。

おそらくこれの頭はどこかへ行っちゃったと思います。こういう物は、これから出てくる土偶もそうなんですけど、お祭りが終わるとわざと壊すんですね。わざと壊して遺棄するか埋めるかする。だから完全な物って少ないんですね。

これらもきっと頭があったんでしょうが棒が壊られている。あそこの石が集められたところで何かのお祭りが行われたかもしれないということです。

土偶の良いのが出なかったんですけど同じような意味があるからついでに土偶も紹介しておきます。土偶というのは皆さんご存知ですね。いま余りにも尖り石の縄文のビーナスが有名なのでああいう形が思い浮かびますが、この辺にはああいう形はないです。土偶は 100%女性です。当然石棒は男性ですが土偶は女性です。胸に乳房があり、お腹を突き出したような形、そして大きなお尻、お腹が膨れたのが多いから殆んどが妊娠した女性を表わしているということです。

これは豊丘村で出た物ですが、あきらかにこの線は腰のくびれからお尻の割れ目まで描かれています。こういったものは割合有るんです。これに関連したものに埋めめというものがあります。竪穴住居の入口、入った所にかめを埋めるんですね。これは高森町でもあっちこっち発掘すると当たり前に出きます。

この石の下、石をどかすと下に甕が埋まっている。この甕は大体底が抜けてるんですね。こういうものはいろんな考え方があって縄文時代、今では出産は病気ではないなんていうと怒られますけど、当時、縄文時代の出産なんて命がけですよ。下手をすると命を落とす。命を落とす人はいっぱい

いたと思うけど、出産は命をかけた女性にとっては大仕事ですから産まれた子どもが、もし亡くなって産まれてきたとか、産まれてすぐ亡くなったとかすれば、このかめの中に入れて葬るとか、あるいは後産が出たらこの中に入れて、底が開いてますからその中に入れては大地に還ると。毎日出入りしますとここを踏むから、踏むことによって産まれた子供がマメに丈夫に育つようにという風に祈ったり、亡くなった子供の生命が大地に還るように、ここを通るお母さんにやがて生命が宿って新たな命が再生されるという、そういったようなことのために埋かめが造られたんではないかというのが我々が理解し易い説です。

諏訪の方に出てきた埋甕に非常に面白いものが出てきてまして、これは富士見の唐渡宮というところですが、ここに絵がかいてあるんですね。

この絵を切り取ってみますと形が土偶と同じ形なんですね。手を開いた感じ、ここにおっぱいかお臍、ここに何かぶらさがって・・・これはおそらく縄文のお産のシーンを描いたものだろうと、非常に有名な資料です。

今、私も良く知りませんがお産は横になってするんですかね。こういうのを見ますと縄文時代のお産は立って産むんですね。立って産むのが一番自然らしいんですね。そこから「産み落とす」が出ている。

だからそういうことを記す資料じゃないかということなんですけれど、それと矢沢とどうかということになってきます。

それともうひとつ、これは豊丘から出たものですが埋甕の底にこういった絵がある。これは顔料ではなく尖ったもので線刻されておりましたが、これを写すとこうなりますね。この勾玉みたいなものは胎児なんですね。この渦巻きは胎盤。こういったものが線で結ばれていて、その線を追って行くと土器の側面にこういった開いた形の、おそらくお母さんの姿がある。結局こういうものは一番初めにいろんなまじないごとが有ると言いましたが、今の絵から見ますと、土偶というのは結局安産を願ったもの、そして、産まれた子が丈夫に育つことを願ったもの。これは埋かめとも全く通じますし、とにかく生命のものが豊かにということですね。

たとえば子供が安全に生まれて丈夫に育つ。同じように食料となる野山を駆け巡る獣がうんと繁殖する。そして当時は植物食に依存していましたから、どんぐりや胡桃や栗、あるいは山菜のようなものがうんと茂りますように、そういった豊穰に対する祈り、これが土偶のお祭りであり、埋かめのお祭りであり、また先程の石棒のお祭りであると考えます。

土偶や埋甕は個々の家族単位のお祭りであり、石棒の祭りというのはある程度の構成員共有のお祭りであります。

あるいは集落を代表する祭りとかそういった違いがあるんですけども、いずれにしても豊かな恵みというか、豊穰を祈るお祭りに使われたのが石棒であったり土偶や埋かめであったわけです。

それがどうして先祖霊と関係するかなあということですけど、古い神話なんかもそうですけど死んだものから新しいものが再生するという観念が昔からあるわけですね。

ですから先祖の霊を崇拝することによって新たな生命の再生を願うということ、これが土偶と埋かめのお祭りにつながってくると考えるわけです。ですからそういったお祭りをしたところが矢沢の石を集めた所だったかなあと思います。

縄文の竪穴住居の痕跡

ちょっとはずれますけど、これは石を集めた部分の近くにあった縄文時代の住居跡が存在した部分です。これはですね、石を集めた部分とほぼ同じ時期のものです。

いくつも穴が有るんですけど、穴の中からいくつも石器が出てくるんですね。壊れて使い物にならないマサカリの刃です。ヨキです。

やたらに捨てるのではなく、ちゃんと穴を掘って埋納した形でありました。

道具に感謝してるんですかね。これは穴の廻りにこういった穀物を磨り潰したり後から出てきます石のおもりこういったものが集められていますね。

そしてこういった石器が出てきますが、かつてこれは石斧とって教わりましたが、これは斧ではなくて土を掘るとき柄をつけて鍬先。ですから小さなものは10センチ位の小さな物は鋤ですね。ですから柄に対して同じ方向に縛り付けてスコップのように掘る。そして大きなものは角度をつけて鍬のように引っかく物、こういう風に使われたということです。刃の先端部を見ますと土摺れしてつるつるした跡が残っています。

こういうものが矢沢からも沢山出ているわけです。あの石器原石というものは矢沢には無く、天竜川から持ち込んでいます。

おもり石の不思議

天竜川の川原に行って昔の人がパカンと石を割って持ち込んだ物です。これ、石を打ち付けるといろいろな破片が出るわけですが、うんと鋭いわけですね。

私もこれで魚を切ったりして実験してみましたが非常に良いですね。たとえば鱈を切れる包丁で三枚に下ろしますとわれわれ素人は身を切っちゃう。だけどこれくらいの刃で骨と身の間をこすっていくと非常にうまくさばけます。これくらいが一番良い。削いでも切ってもうまくいく。微妙に磨り減って、使った跡が見えます。

この段丘の上で砂岩とかが有ったらこれはある時代に天竜川から持ち込んだ石器ということになります。このなんでもないような石ですね。普通ならポイとしてしまいますが良く見ると多少穴が開いています。窪みですね。窪み石というんですが用途ははっきりわかりません。火を起す時の道具だとか胡桃を割る時の石だとか、色々言われますがはっきりしません。これはですね、ツルツルした石ですが、普通ならこれは自然の石だなというところですが、先程の石皿と同じ安山岩という特殊な石ですからこの辺には普通無い石です。

こうした肌の磨かれた球状の石というのは塩嶺火山が爆発して、伊那谷にずっと流れてきた溶岩流の中に入っているということを石屋さんから聞きました。

灯籠の火袋にすると良いと。いずれにしても天竜川に行けば有るわけですが、普通無いので、おそらく穀物を磨り潰すときに使った石だろうということで石器として認定しているわけです。

これはちょっと見るとコッペパン状の石ですけども、これもなんとなく摩れている感じがある。物を磨り潰すため矢沢に持ちこまれた石ということになります。

これも割れてしまっているんですが諏訪方面を起源とする安山岩です。

さて矢沢遺跡の石器で一番面白いものはこれかなあと思います。長い平たい石ですね。これの長軸の両端をチョンチョンと打ち欠いて凹んでるんです。

これは錘石というんですが何に使うかという確定が無いんです。一般的には魚の網の下に付ける物かなあ。或は菰編み石とって、お盆の時の盆ゴザ作りますね。あの時に糸をかけておいてあっちこっちやるやつのおもりだとかいろんな説があってはつきりはしていませんが、こういったものが34から35個矢沢から出ています。中にはこういう物も有ります。

これは打ち欠いたのではなく擦り切った溝をつけて・・・これはおそらく魚釣りのおもりでしょう。実際に復元するとこうなります。

これは鹿の角で針を作ってみたんですがこれをこうして結びつける。私これで魚を釣ってみました。鯉を。釣れました。

これは、おそらく魚を釣った時のおもりかなあと思いますけど、では、なんでそんな魚を釣るようなおもり、或は網に付ける様なおもりがあんな高い所に有るのかなということですが、天竜川の近くではないのに。

現実、天竜川の近くで錘が出て来たという遺跡はそうはないのです。矢沢遺跡でああいった石を集め

たお祭りを行った様な時代、縄文時代後期は地球が寒冷化した時期ですね。寒くなっちゃった。天竜川にも鮭、マスが遡上したということです。

明治の記録に、諏訪湖に流れ込む角間新田で鮭が獲れたそうで、縄文時代には鮭は上がった。でも上がってたんなら天竜川へ行って採れば良いのに二又沢を上がってくるのを待っていたのかなあという考えがあります。あんな高い所から錘に使った様な物が出てくると言うことはひとつの謎です。

弥生の小型の竪穴式住居

それではよいよ終わりのほうになってきますが、矢沢遺跡は高森町でさえ遺跡に指定していなかったところで、本来ならばあんな所には何も無いだろうで済んでしまうところ、ここが遺跡指定になったわけで、初めはそんなに物が出るとは私自身思っていなかったし、岩崎さん（役場職員）が試掘してこんな物が出たと言って持って来てくれた時、結構有るんだなあとびっくりしました。それでも物は有っても大きな集落なんて有りっこないよと言っていっていましたが、実際掘ってみたら住居跡が出てきたんですね。

先程も縄文の住居跡の痕跡が有りましたが、これは完全な住居跡です。弥生の住居跡。3メートル四方の。これが竪穴になりますね。一軒。田んぼ作るときに上を削られたので僅かしか残っていません。

当時の住居、どうやって作るのかということですが、先に丸でも四角でも穴を掘ります。竪穴を掘って柱の穴を掘ります。

そして掘った土を廻りに積む。積んで土手を作る。そして柱を立てて桁を渡す。そして垂木に相当するものを落として玄関付けて。これが煙抜けになって・・・

普通こんなものですね。矢沢の住居跡は1,700年位前の物ですが焼けておりました。これは炭になっていました。これを見ますと、方向が全部中心を向いて焼け落ちていますから、これは小さい家ですから垂木みたいな物を中央に向けて寄せて、前を縛って萱をふいていたと。円錐形の住居が有ったんじゃないかということがわかるわけです。

ですからごく簡単な家なんだと。これだけではまだ住居だということが信用できないという方はこれを見て頂くと真ん中に何か有りますね。囲炉裏ですね。

石を置いて小さな土器を埋めている。囲炉裏といってもここで火をバンバン焚いてどうこうという囲炉裏ではなくて、おそらくこれは火壺。火種をしまっておく所だと思います。こういったものがあるということは、これは明らかに住居ですね。

ただ、この小さな家からはこれ以外何も生活用具が出てこない。土器のかけらひとつ無い。土器も無ければ石器も無い。生産用具ひとつ無い。これは普通家族が生活していた所では無いなあと初めから思いましたが。色々調べてみますと、普通仮に5m×5mの規模でも25平米、ここは3m×3mですから9平米。ですからまるでせまい床面積です。

隔離された住居

実はこれは民俗例から見るとですね、これは京都ですが、集落から外れたところへ造る特殊な小屋があったんです。これは産屋とか産小屋とか月小屋とかいいます。

今はそういうことは言いませんけど昔は女性が出産する時とか、或は月経の期間は血に関係するから不浄だということで、その期間は女性は隔離された。

そして別火の生活をしていました。別火というのは火を別にする。ですからご飯を焚く火を別にするわけです。女性たちはこっちで男衆はこっち、そういう生活をしておりましたが、特別女性を蔑視するとかそういうことではなくて、結果的にそういうことが母体保護につながったとかあるんですけど、いずれにしても女性が一定期間隔離されるというのはあちこちにあったそうです。

集落が有って川が有ってそのはずれに小屋が設けられるという。そうしたことは考古学の上でも言われてきたのですが。

これは京都の大原に今保存されている産小屋ですね。これを見た時ふと思ったことに、たまたま矢沢で見つかった弥生時代の家と殆んど同時期の家がこの月夜平から4～5件見つまっているんですね、昔。

ですから私は月夜平に元の集落が有って、川を隔てたここに、ある時期特殊な意味を持たせた家が造られた可能性が有るなということを考えています。証拠として出てこないのでもっと性格がわかりませんが、現実にはこういった特殊な住居が出てきております。

調査した以外、弥生時代の物は矢沢では有りませんでした。今後、こういったことも調べてみないとならないということですが、いずれにしても石棒の話がうまく纏まりませんでしたけども、先程見て頂いたように石を集めた場所には石を立てたりした所、或は男根状の構造物をお祭りした所、そういった所が有るという事、そういった所からは土偶も出るし、土偶や埋がめのお祭りや共通した要素のお祭りが行われた可能性が有ると言う事、そういう事で思ったことは、これは勿論生命の再生といえますか、豊穰祈願、豊かな恵みを祈願、そういったものが先祖霊のお祭りにつながると。

さてよ、先祖霊のお祭りがもしここで行われたと言うことは、火葬場が出来るのに丁度良い所ではないかなあと、当時現場で話しをしていたわけですが、いずれにしてもあそこが単なる集落遺跡では無いという事。出る物は極めて貧弱ですが、初め遺跡とも思わなかった矢沢のあの所であれだけの物が出てくるということは、非常に精神性の深い物が出て来るということはずばらしいなあと思います。

私は最初にお話ししましたけれど、昭和46年に二金の前を掘った時に、皆さん新切遺跡ご存知ですね？高森を代表する縄文時代の遺跡ですが、あの新切遺跡の住居跡が沢山出た北の川に落ちた斜面のなんでもない所、なんであそこを掘ったのかわかりませんが、平の下、崖下から家が一軒出てきました。

あれは当時主任先生もびっくりしていましたがやっぱりあるんですね。遺跡というと自分たちが住んでいて条件の良い所を遺跡にしています。こんな所には無いだろうと見逃している所もいっぱい有ると思います。

ですからおそらく矢沢遺跡もですね、普通の集落遺跡として考えると大して物が出ないつまらない遺跡だと、しかし見方を変えるとものすごい問題提起の多い遺跡です。集落とは違ったああいう所も有るんだなあとそういったことを教えてくれた遺跡ということが言えると思います。

3、500年位前にああいった構造物を造り、おそらく山の頂に居ると思われた先祖霊を祈り、そして自分たちの集落の安寧を祈り、子孫繁栄を祈り、五穀豊穰を祈り、あらゆるそういった豊かな恵みを祈ったであろう構造物、それが矢沢遺跡のあの石を集めた部分であったのではないかとそういうふうにも思っています。

くどくなりますけど、火葬場としては良い所だったなあと結果的に歴史が証明しているんじゃないかなあと思っています。そういつてあそこへ早く行きたいとは思いませんが、死ぬまでは元気でいて、あそこでお世話になりたいと、その時は焼かれながら、

「ああ、ここは俺達が発掘した所だなあ」と思いながら煙になりたいと思います。

そんなことでこれで失礼します。